里見八犬傳 第輯 卷六

へ18
709
54

遠 13
號 709
卷 54

明治三十六年
十月九日
購求

南總里見八犬傳第九輯巻之六

東都　曲亭主人編次

第百二回

伏姫靈と顕〻敗損と補ふ
義成兵と制め〻家訓と聽く

單表殿臺の頭る諏訪の神社の神主の梶野葉八と喚做る。その性老実兒な
れ。國主の嫡男義成君の參詣あるべしと。ゆえ〻より當社の栄ある時なりと思へば
ばとて堪ずして隊受地子の莊客。幾名欲央にるどして。專神享の准備をつ〻。その參
向と。等しかりけるに既ゐて義通の當社へ詣ゐの折。思ひ〻ひらに開戰起りて。里見士卒に
送られ。敗れし剣。御曹司義通君に禽ふるるて。おそれられる。夏の誤。豪と駭怕れて。夾奴
們と共侶に。躯れて。動静を覘ふ件の逆徒の大將。則是。別人。ならぬ。の地の領。主舘山
る。墓田素藤でありけると。相ると。分明るの。れ〻。野心の所以を知されば。左さる。右さる。思ひ

難き胸安くぞありける程に開戰とやらも支果て逆徒は退去りしかば央奴們を誘引立て去るべくなりて來つれば金斬丸里見の伴當老當若當數人盡して皆是鳥銃劍戟に身を傷られ血に塗れる屍ばかり社頭に累々たり登時無礼しい思ひ寄り墓田主の逆謀は我身を干るのみならず我が舊職に神を敬ふ誠心なき里見殿を欺いて義通君と偽ふ逆徒の卒の數多れども這社へ是參詣の折れば里見殿の我とさへ逆徒ども思ひ誤り始終の勝負を思量るに墓田は計畧その圖に當りて一旦勝利を得れども勢は一城の主に過ぎぬ里見の武威はいかでか敵房總二國の大軍を推寄せて攻撃られ防ぐに術の為なく墓田の滅亡疑ひなし所詮あの凶惡人稲村の城へ訴て我身に幸を干らば心の誠を表さば倒に後安かるべしと憤に堪ずして安房へ逐電せ暗に我身を窃くまで江湖上陝くなるのみならず國主の怒酷しく當社を破却せられん歟是も

亦知るべきなり我身の禍を當社の神に移さまに似る冥罰久後心の為非除是の趣を訴ても奇疑れて今竹龍られ及ぶべきの禍福と時運に儘せ地方の地方。

折ふし後の汚名を思ふに那里に影を躲さんやと獨深念を決めて然るべくも墓田殿は孰の程に狡隊兵を這樹の朽虚に笹置けり哉と呟く樟樹の頭へ躍て立寄りて朽虚の内をくまなく怪しむべし這笹置の樹虚は最大洞穴にて來て人の出入せるべし洞の口に足跡多く原來館山の城内より地を這樹虚へ穿通して那隊兵を出すに奇なり奇也とおろかに足れて一番時立在りて央奴們も評して皆立寄りて見て駭怪まざるのみならず俱に云云と評すと葉門に表に推禁めて益々評議に時を移りて西家に安房へ赴いて稲村殿へ告訴せん住居まで人の亡骸を出し遣ると輒く然ばそこに葉置て社頭を穢しまじんは最も惶れるべく願はは和主們宿所に還りそやよ村人を驅催と野も山も痕めるべきなり

陰德ありん。おのれを美引の刀と憑めば。大家眉を顰めそもそもこれ伝れども我村人い
いまだ日らず臨時の課役ふ驅含まれて皆館山の城内ふ在り縱殘まる者あらとくも里見
殿の伴當の亡骸を瘞め奉り館山殿素藤を疑れて罪ふ陥りし所行多ふ憑むるとを爭
何いせんとふ葉門い困ど果て高左ふ右と相譚ふ折うう但見る安房の方ゝ一朶の
叢雲天ゝ来て社頭を掩ふ程ゝもあらず滿天猛可ふ結陰りて時ふ降りける迅雷電ふ風ふ
颯と吹起りて沙石を飛ゝ樹を仆せ物凄ふ雨の脚い宛金を覆すが如く黒白を別ち
ずゝ葉門いゝゝ兵奴们も駭怕れ頭を抱えて走りて本社ふ逃て竜ゝ皆神前ふ平伏
す。神の冥助を祈るを活方心地なりけり。ふ程ふ風雨いゝゝまもなく吹暴れて殿々と鳴
且る。天津叢雲の起住ゝ現龍などの卷くが如くあゝんゝ扇端ふ離孫廂石も尾も地と拂
ふ。起ゝ計なるとふ程ふ樹の折るゝ音四下ふ響ふて天地反覆ふ為ぬと。戰慄れ俯伏そ
大家ふ為ぬゝゝ約莫半晌許ふして風和ふ雨霽て日影朗ふなりゝゝ葉門ゝ立ふ央

奴们ふ。ちゝ起ふ胸ふ打ふて共倍ふ又驚て呆れ奇なる哉里見の士卒も及城方の雑兵の亡骸ふ
感旋風ふ含まれて那果ふ吹遣ひけりその尻骸のふ死のまゝ那這ふ溜り添れり鮮血い
す。都て迹もなく疾雨ふ皆洗流されて不浄い宮宅もあらざりしなる哀の不思議ふ衆人いまゝ
さてもとゝなりふ今ゝゝふ又呆惑て高那這とゝなるふ大樟ふ大枝小枝もまつく風ふ吹折られて
樹下明くなりしなり。朽虚の内ふいで来る洞さへ件の風雨ふ埋れる狡崩る狡迹ふあらざ
なりしなる大家訝るなる中ふ葉門いふく奇と稱て呆る上半晌許央奴们を召集て和主
们いまゝ思ふ為ぬ郷高ふ殊なる風雨を起して這頭ふ多ふ戰殺の人々の亡骸と那果狡起
為遣りて不浄を洗ひ去りも又這樟樹の朽虚の内ふ。とゝ一洞穴の迹ふあらざり
ゆるも天変地妖の所以のまゝ也。ふ是當社の神所為狡猶情と思惟るふ初一朶の叢最
雲の安房の方ふ来て烈ゝかりける風雨の中ふ是ぬの奇特ありければ那地ふ古蹟あり
ぬく役行者ふ驅使れる神龍などの所行なりゝ狡是も亦知り巨ろ。ふ左ふ右ふ偽

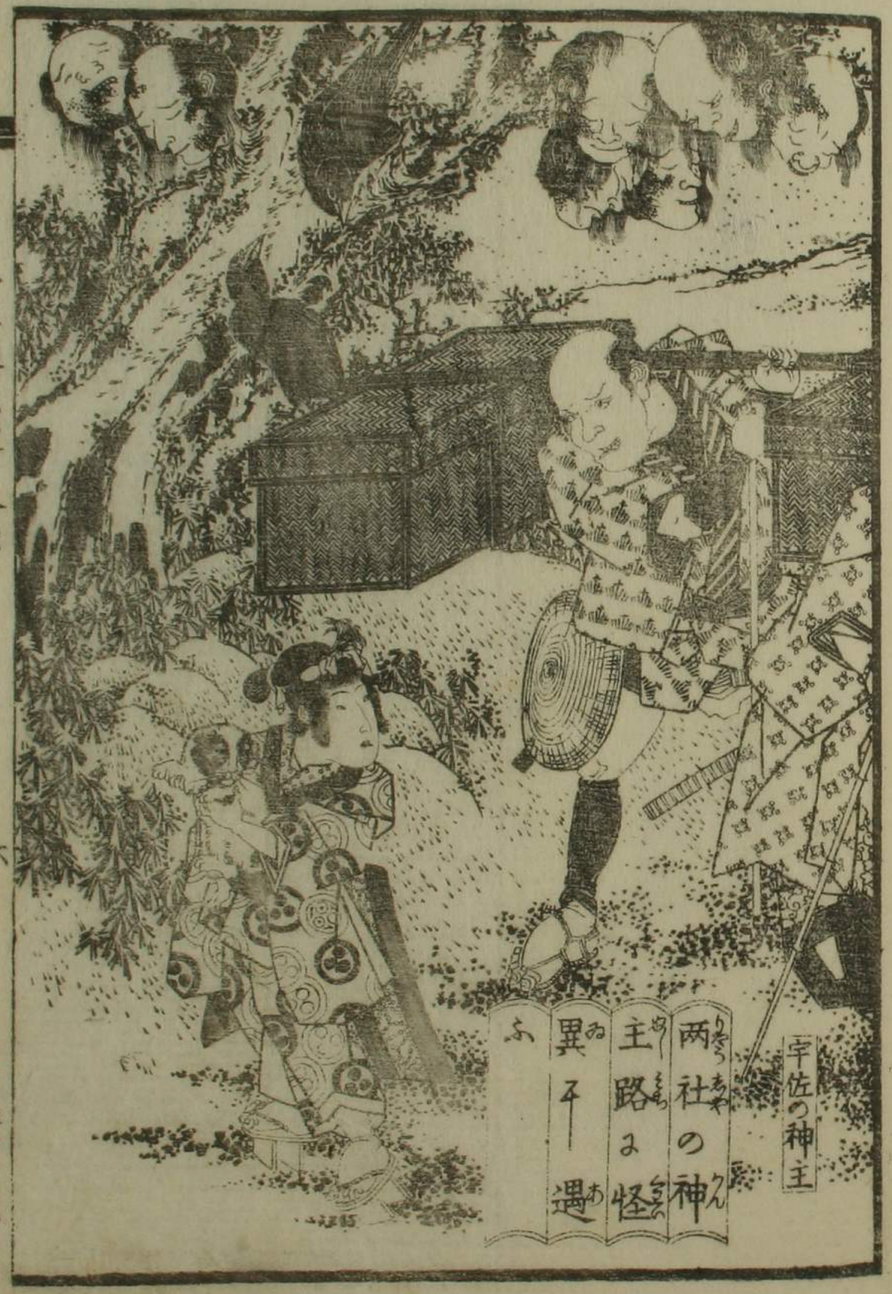
れいわ
るゆ異をえるかくのごとく猶豫せべからず酒家に安房快赴くべしと曹殿へ申さるべし
の後に領主に申さるべし非理の奴らに遇ふとも我宅眷ひきぐし他郷に在れば後安
かの各々もかのごとく沿て問ふとその我往方と草蜢田殿なる知せをと耳にうつ宿所を入りて行装
をそなへんとすれば奴婢共も一両名兼ねて伴ふ立んとて皆を偽りて荷造りする行裏に受合ても
枕に横たはる准備をも整ひければ兼ねて奴婢に送りて
路を別れんとて齊一外面へ出てもく程に這頭を過る旅客あり一個の伴當に行李を駝
をそなまふけるとそれは是別人なり宇佐の神社の神主なれば兼ねて呼留めて什麼同職に
慌しく那里赴くやらん當社に郷高に風雨の折箇様々の奇しきあり然るとも草田の
謀叛ふる里見殿の公子の命令せしかれば心苦しきのみ
べるもいつもふるふ件の神異の事あり戰殺する敵御方の亡骸いまだ風雨の折に紛失あ
なるようさへ國主に告まるうんとそ目今出てもく折に和殿の旅をまもる安房に告訴の與る

ると問ふ告る奇魂の一條疑ふべもあらざれば宇佐の神社の神主に憶ひを連ねる駿嘆
をそなそ古今に例稀なる霊験ふとそれに及ばれ既に猜せられる如く咱に異変を注進
義成殿とかの義に和殿と我のみ
駅馬ふたち跨て安房と投て走りつと方借人の噂を聞あれば騎馬に及ぶべもあらざれ
去向のいそがるふ卒の共伴に稲村殿へ推参せんとのふ兼ねて談ふ及ぶべもあらず連
立てに管路次をいそぐ中そ地に留る奴婢に告別して首途を祝して宿所へ退りて亦程ふ
葉門に
かの兼ねも宇佐の神主僕も心ともなく贈仰て他に甚麼とそなふ俱ふ旅馬訴りて姑且
杖を住めて浩然前面より地方の民の幼児ゆやあんと年十二三なる女子に最小なる狗子に兼ふ
濡れるを勇り抱て走りて這方家ふけるを兼ふ
梟させる國主の公子に通差の伴當なる狡知をと問へば女子は頭を掉て否梟られる

この度の戦に、這首毎に里見様の伴當なれば、郡内の城兵、御尚が諏訪の社の頭を、里見義通君の伴當と戰ひて、敵されし神の鳥ことごとくに、御尚が神の託宣あり、里見の伴當敗られ、後風を起し雨を降して、敵射方の亡霊と極遣ひあらば、安房の富山に迹垂在す神女の霊験と、然ば神女の託宣に、今茲に義通災厄あり、その天命を免れがたし。故に八幡諏訪の神力も甲斐なきが如くなれども、命に恙なければ、敗られし伴當們も、命数其首に畫ぎられ、四陽の時なれば、里見殿怒は無しと克と一時に合ずんと欲せば、士卒を多く喪ひて、支に益なきことを、及て敵の辱に遇んのみ。安房へ赴く者あらば、その旨を國主に告よと宣示させのけとよ。就身們稲村まで、里見の殿に、ものが浮て言ひあらばと思ひ騒しめ、ん、やよ怪疑しあるを、解ずして、又走ることなかれ。と喉禁めも、再問んとすれば、狀形は消てなりけり。今又佞る奇異神まで、誰ら敬畏ばれば、るべし。大家ひとく感嘆して、大々ことを、改示現応報凡虞の及ぶ所、是併明君の善政

徳義微なれば、佞る神祇示現あらんか。日の昏暮るとも、通宵走りて、國主へ注進せば、卒快快といそぐ。しかれども、急されて、脚曳の山路、歩みて、捷き方と、倶に安房へ赴くに、休題再説。今来里見義通の伴長なる、堀内藏人貞行、杉倉武者助直元、いとの妻の、死穢産穢ふかの、召遂さるこゝろ、ゆえに、大樟村より、辭退して、次の日未下刻、時候、稲村の城に、かゝり来る。先伴の若黨、と、同僚、許遣して、帰着のよりと、報知る。各々宿所へ、赴いて、貞行、妻の、恙もあらざ、直元が妻も、亦異なることの、なければ、迭に驚評りて、その故と、問ふ、ふかの、べしも、あらじ、皆怪しと、勝ぎて、呆れ、ざるのみ、なりけり。然ば直元の、父水曽介氏元、その、新評議の、席に、追て、又まゐらんと、せし、程に、直元、們が、召に、応じて、帰着のよりと、対面して、ものを、言ふ、直元、答て、然は、昨日、御曹司の、恙もなく、上總の、大樟まで、到らせ、給ひ、折大城に、遣されし、那鮫内、葉四郎が、馬を、走らし、赴、蒐来て、と、告て、奉書と、遞與して、その、支の、趣を、堀内、生の、妻は、身故り、児が、妻も、亦、難産の、難を、生れ、児は、死胎、と、恁れば、忌服、産穢は、

葉門


宇佐の神主
両社の神主路より怪異不遇ふ

係れり。神変の所ハ伴に達べからず。只這両人のミならず貞行が妻の親族の忌服を稟る毎に
ハ貞行直元們と共侶にかゝる恭ぶべしとあるを下知分明なりしかバ巳ことを得ず支傍ひと小森
浦安們に告知して幼君守護の大任を兼ねて其首より退くる侍四五名あり某々某甲某乙
なりと然に見今かゝる来て変の相違に驚れぬる一期の不覚なの上なし是狐狸の所為なり
ある妖怪しき変まれバとそる陳されバ氏元憶つ嘆息して約莫今番の奇異瑰怪ハ只是の一
條のミならず和郎が不覚をいへバゆる蔵人ハ開基以来我君三世の股肱にて武勇才略ある妖怪
変化の與に魅されけん是非定にとの詞を訖らず貞行悄々地に這里に来て對面を請ふ
と云ずハ氏元ハ直元と倶に閑室に迎入れて賓主の席定りけれバ貞行ハ面を擡げて氏元にうち對
ひて某不覚の顛末ハ宿所に退りて初て知りぬ既に件の趣ハ今息に少知けん昨日大樟にて受とり
たる各連署の下知状を合せ出て再見てけるに有しあハ似で素楮なりし徒然ば恁使と称く彼那
鮑内来四郎もその人にあらざりしを妖怪に疑ひなく解くべきよりも先罪を怕れ命を惜みて獨悄

悄地にあるにあらば是に就ても郎君の所ハ上さに心のとなし。作麼いかにしても可らんや教えと不
楽しげに問へバ氏元嗟嘆して変の疑惑ハ然ぞあらん見今後見に係々と解示まえと思ひし折に那
鮑内来四郎ハ昨日も終日衙所に在り又今ゆゑに疑ふべくもなし下知状の一條ハ證拠なき似るも肯
一層の大奇変あり是によりて和殿們が途よりかへりて来ぬるより由義に少知りぬれとて貞行直元ハ共侶に
又驚きて然亦甚麼なる故にと問へバ氏元然なれバとよけに亭午の左側に蒼天猛可に結陰り勍風
颯と吹起りて咫尺もわきがたく折りし程しもべし這大城の東門にハ人空中より吹落されし脩累
すし士卒百五六十名皆気絶して地上にありし係而雲霧消て照る日隈なくなりしかバ本番の
雑兵立出て旋馬怪みてこれを撿せしに皆是御内の士卒にて猶昨の朝御番目司に倶して上總へ赴
れる毎なりと示めあるに小森篤宗浦安乗勝由稅逸友并に古屋宣京能宣等も都て那身そ中に
在て東瘡を負ひいなりけるぞ中に篤宗乗勝逸友ハ或ハ背或ハ項亂の側面をも劈ざるを酷く
斃されし鐵砲瘡あり宣京大変の傷痍あれども幸ひにして裏を鉄まず銃丸ハ胃の間にあり贅

重病に堪ざりけん死に程経しに似たれども尸の脉絶ずして胷温るもまだうと注進たれば
竹内の君臣共に胸を撫て有司に命じて殯師と医官合て専療治を
尽させ給ふ。実検に遂げ殿師と医官合て専療治を
尽させ給ふ。宮宗無勝逸友景能都て侍品二十餘名雑兵二百十数名各甦生あらざる。這
宅内の所の深病を禁療の術の届ざりける。雑兵二十許名あり。又宮宗無勝逸友の輩は殿療
立地ふるの数を尽て死ざるとぞ。これを縊り呼吸の暢ふのを待て筵
輿に乗せ各宿所へ送遣し死るものは親族妻子に賜ひて安葬せ命せられ然而氣
力本復あるは苫屋八郎景能の同住所へ聚合て支の仔細を尋問ふに景能の輩が
稟去る昨夜御曹司の夷隅の新戸に御止宿まして今朝那殿臺の頭なる両社の八幡
へ御参詣支詣ぬ。其首より又程遠く紀諏訪の神社へ詣の程に杜頭に最大なる
樟樹一株あり。その幹約莫十圍有餘中心朽て空虚ふるとぞ。這樟の枝葉も上總に二本は名
物なれ亦怪むに足らねども小森浦安房の前夜に支熟たる老兵を三所の社頭へ遣

わて那里の為体を検させ給ふに異なるものいふ死のごとく當朝那樹下に敬言固の雑兵十名
有餘を立て非常に備へる。程に御曹司の樟の頭を過ぬ。本社に近つかぬ折
から突然として樹の虚より轂も出も鳥銃の響に般若の賊の伏兵防禦に進むに及ばれば
非常の與に備へる雑兵たち皆在る甲非文る。王君の左右に従ひ給へり。小森衛門浦
安兵馬の空虚所を轂して仆れる是ぞ駿く近習の毎皆郎君の盾よりて又轂
の勢に登時件の樹の梢より居ヨの賊徒顕れ出て各々持る器械を振晃めて
競ひ鬼る。件の人々に向て遮制めて挑戦ふ程に那縁虚より出設
鳥銃に又ヨヌく轂られて御曹司の左右に防ぐ近臣あらばこそ一個の賊兵ども
莫舎地に走り出て犯しまつらんとしけれ。御曹司は乞佩刀を抜て雄々尚幼
弱の面ーまなども自然と備る武将の大刀風當るぐるもあらばりけん件の賊徒い表脛城
斬られて撞と仆れる後方に覘ふ一個の敵あり。その賊の大将るーん透とるとと御曹

し。司に杢をと組で動しまへずも躱て肱腋に攫摑て禽にせで退く程に間遠なる在下们
まで吐嗟とばかり驚惘えて拯ひまゐらせんと欲せしかども亦復賊徒の連發つ鐵炮劇し
かりければ大家ひとしく輙く仆されて其後の事を知ずといひけり又那神祠の鶏栖の頭にさむ
らひゐるあん伴當们は社頭の銃响に駭噪ぎて稠入らんとする折賊の伏兵猛可に起りて。
前後より挾みて頻りに發つ鳥銃に當るべくもあらねば免るゝものは稀なりけん我们は同枕に
仆されしより後の事をしも知らず。社頭の方より操合されし。その隊の賊徒の頭人は今朝館
山より。御曹司の。あん御道すがらまゐらせたる蟇田の老黨奥利本膳盛衛に好似たり。
其かあらぬか混乱の折なりければ定安ならねど大概は違ふまじく。やや既にして我们は皆是必死の
者なりしに甚麼なる神佛の祐助にかよりけん不思議に這里まで領て返されて甦生の幸ひ
あるものから只痛しきは御曹司のあんらくにてそはまをすれどおそるべく申もえあげざる陳謝孰も異
ならねば更に疑ふべうもあらず。侠れば賊の大将は必是館山なる蟇田權頭素藤ぞ

あらんずらん他は昔年に榎本の城主なりし千代丸豊俊主を媒妁にして濱路姫を娶られ
とぞ只管に請稟されしを舘とのゝ許しあらねば那人遂恨に堪難て倍る逆謀を做
あしるらんと只思へども思ひ難しは敵の進退奇異のことなるぞ御曹司のあん伴當の矢を
ならで毅されしに命芽出く路十數里を隔し上總の殿臺より這城内へ返されし徃
昔もかゝる例を聞ず多くて後世はなき事有るべからん。よりて憶ふに和殿们の不覺も亦凡庸と
めて然ればなるべし論ずるに及ばねど左まれ右もあれ件の事の趣の詳に聞えてより臣们が當
惑はいへばさらなり我君驚駭給ひあさ胸ゐるゝ安らず况御曹司のあん母上並に胞姉妹の
姫上達及給事の女房们までよしと聞て皆うち泣て悔の八千回郎君の安危を思ひ
する瀬なき涙の川に水増て深き恨によるべの山岸もなきさへ難し。嘉悲哀泣いかでも査
あるべかし。さてとて瀧田へは急脚のあん使を遣されてよしと大殿義實に告なまゐらせ文殿
臺館山の島道へは悄々に使を遣して逆徒は只那素藤なるや且御曹司の御安否を

悄々地ゐ撥りまゐらせよとそ。そ安くその義を命ぜられ。然而老臣們を呂聚合て評議を凝さるゝども。正可ゑ認め難き敵ゐ。征伐の義ゐ及れも任ず時詛をゆ。そ一五一十を解示せ世ゐ未曾有の奇話怪談ゐ貞紀と直元ハ醉るゐ似て驟然たる目を注ゝ。且羞て後悔のあるゝ達よりあゝ。貌を更め恭ゝく氏元ゐ。對ひて思ひ付き奇々怪々倚伏ハ糾ゐ纏み。飲凶中も士吉事あり。不幸の中ゐ幸あれ。そ。伴の毎の必死を那首ゐ免れて。横當城へ返さ。たる天資神勦の奇特を思へ。御曹司も義ゐ。御歸館の日のありのやせん只一面。ゐ我們のそ。伴の人々と。弁一戰殺ゐ。そ。臣ゐ。方ゐ。稱ん。薄情や女々ゐく妖怪ゐ魅されゝ中途より退て君の御先途ゐ遇恨と。爭何せん。惴りて。蓋ゐ所ゐ。一騎敵城ゐ。高ひく。屍を那里ゐ曝さ。欣然ゝゐ。雛肚極所ゐ。外ゐ了簡ゐ。這身ゐ不測の罪あるゝ上の御憲斷を俟ぎて。恣ゐ身を殺ゝ。不覚の上の不覚とのゐん。願ゐ。檢使を賜りて。自殺を許されゝ。そ。切てゆゐ。べ。その義を。馮心ゐ。倍話れ。亦直元も親と貞紀とゐ。そ。某も同意。覚期極め。身ゐ。今更深念ゐ及んや。と。氏元嗟嘆。そ。趣。ゐ。堀内氏ゐ宿所ゐ退て。兒下知を。孩兒も慎ゐ。べ。賞罰君ゐ。臣ゐ。ゐ。罪ゐ。自殺を急ぐ。と。と。語ゐ。慰めて。辯ゝ。評議の席へ。いそゝく出て。貞紀直元ゐ生別ゝ。伴當を領て。悄々地ゐ宿所へ退ける。却説。その日晡時ゐ殿臺の頭。正八幡の神主ハ。一騎稲村の城へ馳着て。有司ゐ就て。委々と。草田素藤ゐ謀叛の趣。里見の伴當ヨ。く。駁られて。義ゐ連檎ゐ。とゐ風聲。紛れ。と。詐稟ゝけり。是ゐ。素藤。ゐ。怨敵ゐ正ゐ。素藤。ゐ。疑ひ。ゐ。めゝ。ゐ。風聲のゝ。ゐ。義成朝臣ゐ。その忠告の速。を。誉さ。て。留めて。再度の注進のありやせん。と。ゐ程ゐ。這夜子の比。及ゐ城の門戸を敲くものあり。當番士卒誰

と問へば。是則測人なるぞ。上總の殿臺の頭る。諏訪の神王梶野葉門と其眞遠る守佐八幡の神王某ひが火速の注進あるまゐ。有司ふ見參と請ふとゐり。遮莫丙夜の過れば。内へ穴谷まぎて支の由を鞫るふ又那逆徒の一條ゆて。所措くべ。ふ思ぎれ。有司ふ申さえあげ。免許を乞て。葉門們を問注所ま案内さて。躯て詮議ま及れらば。葉門們い素藤が逆謀の為体風雨ふよりて敵御方の屍骸ふ。又那花樟の虚の内ま猛可よいで來。洞穴ふ。風雨の折ゆ埋れけん。迹ぶ。又那神祠を相距る三約莫十町ばるる。路傍の並樹の枝毎ふヨメく鳥ま。唱吸ふ。その首級い義通君の伴當と戰ふて斃れ。館山方の雜兵ると。始い知やう。ふ。女の子の告るふよりてオふ。知ぬ。又那怪。紀女の子の。神の示現の箇樣々々と告示され。顛末と逆ぬ。許禀まゆ。有司們い駭然と又這奇異ま。惑ひて云云と鞫れば。梶野葉門が禀まる。在下們い去歳の冬。新領主菖田殿の三社を修造あらと

ゆて。他郷よりかの來る。然而舊職ふ補せられて。今番御曹司の御參詣と相欺ひてゐ。のま。那人の逆謀ふ。素より毫も干かゝ。伎倆と夢ゆ知ゝされども。仕まられる諏訪明神の社頭ゆて支の起るゝ。有數ふ後安ゝ。遮莫菖田い領主でも。安房上總下總まで。都てその地ふ。誰ら一人も當館の民るゝ。快ゆ。と許ゝ。赤怒と知召ま。ゝ。と思ひて。夜ま日も走て真夜半ふ。伎い推參仕ゆ。賢査を願ゝ。くて。と又他支もゆ陳ゝ。伎而有司い件のよりと。ゆ。あげるふ。這時杉倉東芒川の三家老いる。評定の席ま。在ゝ。義成ゝ。又その席ふ出ゆて。三家老們ふ。殿臺る。諏訪の神王梶野葉門們が。許の趣の虚実什麽と問ゆ。氏元清澄辰相們い。俱ふ頭を傾けて。迭代ふ禀ま。件の葉門が許ゆ思廻らゝ。賊首菖蒲田素藤い。鬼神と使ふ幻術ふ。熟ゝ。ゆ。然ゝ。一夜ま地道を穿ちて。那樟樹の虚内ま。出入ゝ。ゆ。伎ま。路の

樹の枝に梟うとゝ〳〵賊徒の首級も又那怪しの小娘も皆是他が幻術宅御
方に心と饒さまる。計策はいつぞや。その疑心とそ推もとゝ八幡諏訪の三神主も
真の忠許ゝ〳〵ぎゝ。敵の間者欲料りかさう。堅く拷問仕へば実を吐くとかゝと
ふと義成推林ゝて否我も疑いるゝたみあくねど小まそまゝ暴くせんは要ゝ。御向ふ
館山へとそ遣しゝる。悄々使の還るゝ。他们が虚実も知るよゝあゝん有司们いその三
個の神主。姑且獄舎に繫ぶ。措ね然べとそ暴々ゝ。他们を呵責べゝ〳〵罪の疑
きゝあゝるれば心と用ひ勦りて。酒肉を與て尉めよと旦取可寧に仰されば有司は異
議ゝ〳〵ゝるゝ果て。俄のごとく相計ひけり。徳而その詰朝義通の伴當の數ゝ漏されゝる雑
兵四五十名刀鎗児と帮助てかゝ来ゝ。昨日上總ゝそあゝ。社頭の凶変逆徒の生捕箇
様々〳〵と呼えあげて。小可们い阿容々々と命と惜ミ〜ふひゝ。ども懲ま敵の鋭頭を免れ
なのゝ俺我毎が提と合ゝるべゝ〳〵ゝのゝけれが還ゝまゝかりて那凶変と告まゝ〳〵んと思ひ。

刀鎗児と肩ゝ掖被て。辛く退ひ〜ふ。撥ゝあゝ如く深疾浅瘡の兵毎過半ふ〜へ。
昨夜通宵走ゝ〜ゝ。左に右路次の果敢ゝ〜ゝ。日今帰着仕ゝ。我们那折ふ山
蔭に退ゝて刀瘡児と勦ゝ〜ゝ。程に猛可ふ雷雨降ゝ〜ゝて。鋭風烈ゝ〜ゝ。けゝ〜ゝ大家
樹下に立取ゝ〜ゝ。雷雨ゝ〜ゝふ及ゝ〜ゝ。出ゝ〜ゝ来ゝ。那諏訪の神祠より。十町許ゝ〜ゝ。路傍の
並樹の枝に梟ゝ〜ゝ首級ゝ〜ゝ。ゝ〜ゝ。思ひ折路ゝ〜ゝ里の少女に遇ゝ。ゝ〜ゝ。
喚留めて。首級のゝと尋ねひ〜ふ。皆是賊徒の首級ゝ〜ゝ。神の梟さゝ〜ゝ。その故ゝ
箇様々々と其首に近ゝ里人に託宣さへ有〜と云ゝの趣ゝ告知され安房へ退ゝ。
是ゝ〜ゝのゝ里見の殿に。ゝ〜ゝ。素藤と攻ゝ〜ゝ。倘即功を
貪ゝ〜ゝ。損ゝて益ゝ〜ゝ。ゝ〜ゝ。亦神の教ゝ〜ゝ。義を具に言ひ〜ねと。ゝ〜ゝ。思へ件の少
女は撥消を似ゝ〜ゝ。我们微賤の小卒ゝ〜ゝ。御曹司の御先途に戰殺ゝ〜ゝ。
何容々々と今ゝ〜ゝ還ゝ〜ゝ。罪と免ゝ〜ゝ。怒ゝ〜ゝ。なれども神の示現ゝ〜ゝ。吏祥瑞ゝ〜ゝ。注

進の與、證據の爲に件の首級を此ニ處りし。齋くしてそれを見れバ皆不娯しげに告訴して賊徒の頭顱を兩三級有司の実検に入れけり。尓程に有司們ハ件の首級を遂て先杉倉東荒川の三家老に傳達して主君に申あげしかバ、義成これを聞召て五個の老と有司と俱に召近つけて宣ふやう。初那神主們が訴の首叉の趣怪談めかしく證據ありけれバ、敵の間諜であらん歟と思ひしハ是凡夫の疑心。今又躬方の雜兵們が還りまゐりて稟せしよしの這那既に吻合すれバ疑雲霧越に霽て、正に當家を守らせ給ふ神の冥助と感悟せり。然バ義通幼弱なり、敵の擒になりたりとも他が與に會稽の恥を雪んこと易かるべし。有司們ハ三社の神主を皆獄舍より釋出して姑且當城に留置ね。又件の雜兵們ハ數にも足らぬ小卒なれども、死すべき死に死なずして免れてかへりまゐれバとて外に咎べきものにあらねども、況その毎に痍を負ふるも且しと雪げバ始よりして逃るものにあらず。然バ刀瘡ある者に醫療を加へて後の課役に充べきのぞようにせよかしと、悩ある寛仁大度の君命に有司們ハ傳へて、三家老們も齊一嚬とぞ

感じたるぞが中に杉倉氏元ハ姑且して稟すやう。今番斃されし逆徒の首級を路に並樹に梟られしも、風雨を起して御方の士卒を當城へ領て返されて過半甦生に及びしも、伏姫君の大神靈の冥助ありといふも偽ならじ。那大士們が必死の窮阨ありし折、伏姫上の明靈魂他們が影に立形に添て保護救ハせ給ひしとおもふを思ひ合すれバ、他し神ならず。孝義心烈和漢に罕なる姫上なれバ、亡後まで猶ハ賞善罰悪の神威折毎に灼然たりけん。最有がたくハへとぞいふを、義成聞給ひて我も亦如右思へども、幽冥の事鬼神の出没ありとある人ハ則有りと思へバ則有。その故に聖人ハ怪力乱神を語らずといひぞ。是譬ハ今番の神社冥助と我妹上の神靈ある歟、或ハ當家を守らせ給ふ他し神の靈驗なる歟、思ふて得べき由もなし。そを奇に惑ひ神助と憑ミて自ら守を外にせバ、世に大將たるものゝ本意ならじかし。然バ躬方に祥瑞あれバ敵にも亦奇しきことあり。那素藤が伏兵も館山の城内より地道を潜りて、諏訪の社頭の樟の樹へ出ることなかりせバ、徼くかるべき技なるに、風雨の折にその洞の迹

だぶあ〜ぎろり〜と呼けば現素藤い鬼神を役ふ幻術ふてを長しうけめ任れど是ふ敵
るりとく必ーも侮るべ〜ぎ然い思ひまも。と示さる。是や二代の良将の高明睿智ま悟
啓け〜氏元只顧感服して又のみもあるりけの登時荒川清澄の東辰相とえろへうく。
共保禀まう。敵と知り又已と知るとの。兵聿の上旨ふ稱せめい。非除素藤螳螂の
臂を張んと欲まるとも。征伐踵と旋ま隙るく誅伏せんの疑ひる。と思ひへども聽南れ
城主武田信隆椎津の城主真里谷信昭槙本の城主千代丸豊俊約這三城主六
年来素藤と親〜ものの。就中千代丸氏い豊義ふ素藤ぐ與る媒妁して。濱路姫
上の御嫌談。執〜禀せ〜るーもあれば素藤件の三城主。逆謀ふ引入れる狡これも亦
知るべ〜ば。再度の密使と遣ーたいで件の三城主の動静を探らせひむや。とらべ義成頷ひて
然ばとよその乳後度の使价八十名許ま。上總へ遣ーて諸城主ふ徇示さえい莫蛮田
素藤謀叛ふ。至義成みづ〜〜征伐ま。べーまれども那逆將いオふ一郡の孤城ふ據れ。

各々加勢と出ま及ぶ。皆その城と固く成りて。ときく非常と備るとも忠とせんの義ふ違ふ
べ〜ば。と告文を廻〜さば。那豊俊们三城主の順逆邪正も知るよーあえん先這使价を
快課せよ。我ら日ぶ〜ぶ出陣せん。且人馬の點撿〜。と仰れば三家老们い異議も
るく言葉ーてぞ退のけ。却説這次の日ま。鄕高ふ館山へ遣ーたる三個の悄々使们がかり
来て那里の動静と報禀まう。鄕高ふ許ヨの伏兵とのそ。御曹司を犯ーまるーば賊首い
知召まで墓田素藤ふ紛れいま。然りけれども幸ひる御曹司い恙もるく。那城ふ拿
竜られて御座まとのふ風聲ある。却素藤い竜城の准備極めて嚴重ま。敵難寄
るバ一箭射んとて土民と驅入れ戰粟と積貯且隣郡の城主们ふ利害と說薦ま。
射方とーて。椅角の勢ひと張んと欲まま。ふ孫ふ往日諏訪の社頭ま。御曹司のあ伴
當と戰ふて敗られる。賊兵们が亡骸も當日大風猛雨の折ふ社頭ふ埋まぎるふる。
その首級と十町許。ある。の並樹ふ梟てありーと素藤ま安く偖笑てぞ。諏訪の神主

們が所為にぞあらんずらめとて。搦捕せんと為てける件の神主・王葉門はさらぬだに八幡両社の神主們も逐電なしつと聞えて。只素藤のみ怒に得堪ず。躯てその並樹の四下なる荘客を皆搦捕して緊しく拷問なしかども。他們はその事に干らず。里見殿を守らせたまふ神所為にてありけるよしの。縷々の託宣ありきと。斉一陳じけれども。素藤毫も実とせずと。悉罪せし件の荘客們を屓して死刑に行ひけり。這故に那城内なる軍民は皆その猛威に憚りて陽には軍令に従へども。陰には隙を覘ひて逃去らんと欲するもの鮮からずと聞えたりなり。然れば御方の大軍をもて。火急く那城を攻させ給はゞ。内応のものありて火を放ち煙を賜へ城を献るものやあらん。御捷利疑ひなきものゝ候と具に注進まうしける。是により義成は又三家老と有司們を召寄て。宜しく御商量も。舘山へ遣しける悄児の注進便宜をなされば。我明後日の比出陣せん。賊将蟇田素藤は。妖術あるものならんぞ。折くれ獸血并に葷水韭大蒜なんどを灑掛るに優よとありし。かれらの準備もまたその為なり。その

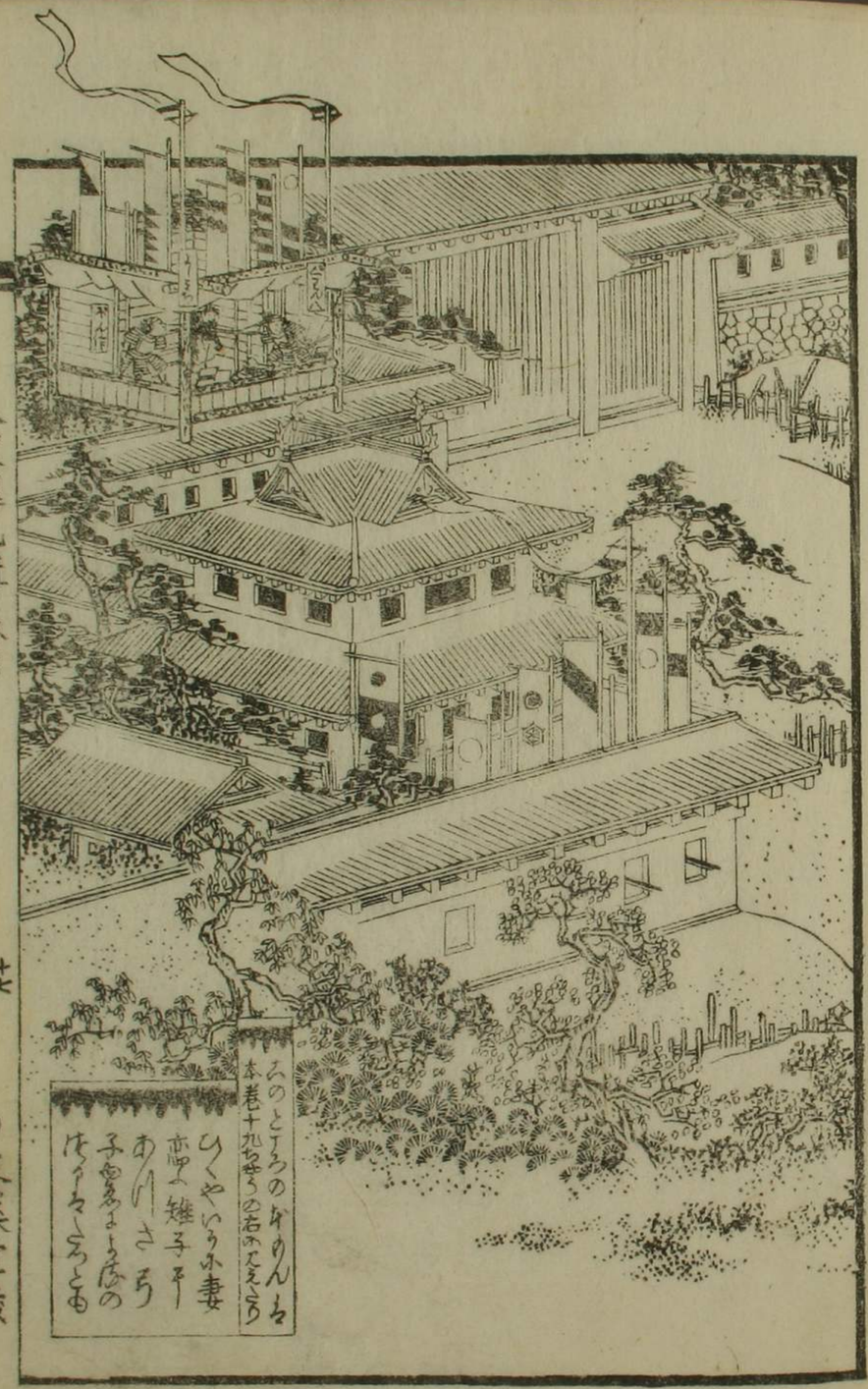
餘の事は箇様々々と軍兵の多寡戦米の運送まで事悉く部を定めて又家老に仰するやう。御曹司貞行直元們が事汝達恩免を請ふとのみなれども宵衣旰食に多務に紛れてけふまでその沙汰に及ばざりし六郎并に兵庫助は明旦貞行を相具して出仕せよ氏元も同時刻に直元を将てまゐるべし。委曲はその折知らすべしあらんとて叮寧に示さる。三家老們は欽で命を稟して有司と共倶に退りて各暇なき勤務にその日を消しけり。爾程に堀内蔵人貞行と杉倉武者助直元は。一期の不覚に必死と極めて快実撿使を賜れて肚を斫らんとおもひつ。各宿所に屏居て暖気もせで在けるに家眷は一入憂に沈みてぞ慰めかねるものもあるなかに四五日を過せし思ひがけなく三家老より君命を傳へられし明朝出仕の恩免ある我們同道せべしとの奉書到来しかば一家児の歓びは枯木に花の開く心地して日来屬念せし神仏に賽願も暇なくその準備とのゝ急ぎもあらず貞行も直元も今番出仕の恩免は面正しくもありながら只君命の辱さに人の毀笑を見

文渓堂蔵

久〻毛次の日礼服を整へ〻三個の老臣と共伯ふ君所ふ伺候あらゝべ義成躬く對面して懇〻慰めゆるう鄉高ふ汝達が不覚のその顛末を詳ふ聴ゑ凡庸る野狐るゝどの所為ふーあゝ人柄ふ似げるを不覚とのゝたまべ憶ふふ這回の奇異妖怪い是迄明未聞のるふーて。躬方を祐る神佛あれば敵ふも資る邪神あゝん然ばゆゑ義通の伴當ヨヌく數れーふそゝ當城ふ領て返されて過半甦生の幸ゝあり且賊徒の頭顱を奪て路の並樹ふ梟られーも則是當家を守りゑふ神所彩ふてそあらゝめ又那舘山の城内より一夕ふ遠く地道を穿ちく諏訪の社頭の木虚伏勢を出せーい是五月蝿成悪神の墓田が與ふせーるんそゞ中ふ汝達を欺て途より返せーいゑも亦守る神所彩ゆゑ然ーも可惜老黨を數きせドとそくの眞助るーー狡然ゝまい又墓田が與ふ利るゝ奴智勇の覚あゝ汝達を伴ふあゝせドとてそも亦邪神のるを〻る狡凡慮ふ分別まづゝもあゝねど幸ゝふーて我股肱の敵の矢石ふ傷られざるーい倒ふ躬方の利ゝ汝達那首ふ戰

殺まるとゝ義通も亦免れ沼ぬ後々まで躬方の不利ゝ信れば汝達が妖怪ふ魅されゝ不覚ふ似て反て主の與ふ宜ゝ理あり因て罪過の沙汰ふ及ぶゝ那折倶ふ立帰りゝる藏人が妻の親族們もその義を以宥免ま今番の軍陣ふ従ふく功をそ耻辱を雪ゝべ其身々々の所以のこゝをーぶゝゝる義通の與ふかゝーゝろゝる狡と理を推て諭さゆゑ明君の德誼を胆ふ銘まるまでふ欲び思ふ自ゝ直元ゝ家老們も共伯ふ感涙半目と數瞬ゝて各々欲ひとゝ亭ーけゝ君臣一致世ふゝゝゝ素ふよゝ武備の名家ふゝゝれば左右まる程ふゝゝも人馬の調煉整ゝ義とゝゝゝゝ義成いその涙の日ふ出陣まべーと徇さゝ今茲五歳ふゝゝ二男次凡幾ゝ上総介実尭・ふ老黨杉倉木曽介氏元と片川兵庫助清澄と傅ゝて留めて稲村の城ゝゝゝ。然而杉倉武者助直元と先鋒とゝ堀内藏人貞行と後陣とゝゝ義成則中軍ゝゝの餘東六郎辰相い遊軍ゝべー期ふ莅て戰ひの弱ゝゝ方ゝ援けゝとゝ既ふ隊伍と定めゝるその勢約莫三千餘騎文明十五年春正月廿一日

厚相


このところのかめんは
本巻十九ちゃうの右のたえうり
ひくやいうホ妻
亭ノ雑子子子
あり　さう
子多ゑまよう屋の
ぢうさうとも

と徒べく幾騎とか
ゐ結ゐも
雀唱れ倚
ふのこ

雙の折とぎくせうにたとふ
謂日なり逆將墓田素藤と征伐の首途とゆゑけり。小程ゐ郷高ゐ義通の伴當の死ぬることを
聞て中ゐ芝屋八郎景能と首とて銃瘡の大抵い癒る士卒もあり。ゐのこで今
番の御征伐ゐ従ひまつらんとを請稟あり。義成一切許しゐぬ。その兵毎の志氣ゐ勢ひ
紀筋ゐれども。まづ全く痍平愈せで戰場ゐ赴くべからず。景能い先試ゐ荒川兵庫ゐ相
副て瀧田殿義実をゐふ。使ゐ達ゐ我大人の日毎々々ゐ急脚の使ゐ。その回ゐ奇異義通
が安危を。偖ゐ毎ゐ報稟せ。ゐど。胸苦しく御坐さるめ。我身出陣のゐ告別ゐ
ゐるべう思ひまづ。軍議ゐ服ゐ紀をのそ。その弐ゐ及びさけれ。荒川兵庫助と名代とて那里へ
まゐらせべれと。既ゐ紅庫ゐ吩咐ゐ紀。景能も亦俱ゐまゐらば那折のゐ詳ゐゆゑて慰めゐ
よんがゐもゐ。然を略次ゐそゐ。要ゐ自愛して轎子と用ひんと勿論ゐべ。然ば戰場へ
相從ゐ。大人のゐん許へ使ゐるゐ勤務ゐ同ど主君の與ゐの弐と思ひ諦ちそと諭させて
又清澄ゐ景能がゐ箇樣々々と叮寧ゐ。兵庫助が瀧田殿より立ゐ来

ゐる。木曽介ゐ當城ゐ止宿ゐ。と捉ゐ心脱落ゐ。けり。間話除煩却説里見安房守
源義成朝臣い三千餘騎と引率して稲村の城と進發して。安房上總の封疆ゐる
市坂と越ゐ。程ゐ郷高ゐ上總の諸城主へ告文と奇して遣される軍使十名のそ中ゐ三名
許かゐ。本陣へ報稟ゐ。小司ゐい榎本椎津廳南快赴て那里の三城主ゐ告文
遞與ゐ。御諚と偽て。その動靜と覘ひゐ。件の城主達い當初墓田素藤の吹舉ゐ
俱ゐ獨立の志と轉して。當家ゐ帰服せ。比ゐ。素藤と疎ゐ。ねば。ゐん疑ひと怕れ身と
陷て墓田ゐ一味ゐ。ゐけん陽ゐ異説ゐ。言語心對潔ゐ。その面色不快ゐ
えう就中榎本ゐ城主千代丸豊俊い景襲ゐ素藤が與ゐ媒妁して。濱路姫上の御
婚姻と。彦与稟せ。ゐも。れが免れ。と思ひけん。悄々地ゐ人馬と敕正て。篭城の准備ゐ
るゐ。ゐ。因て。ゐの弐と注進の為。先我們ゐ那里ゐ走り。ゐ。ゐ。と喘々ゐ。ゐ。
義成ゐ。ゐ。ゐ。聞ゐて。ゐ。ゐ。士卒と分て。快件の三城と攻撃ゐ。ゐ。ゐ。姑且這

里ゑ人馬を住めて。今番の先鋒後陣ゐる貞行と直元を中軍ゑ召取へ件の支の趣ゑ箇様箇様と解ゑて我汝達ゑ一千の精兵を授くべ。藏人ハ武者助と副将として這里より榎森城推寄て。快豊俊と攻撃ゐね那里の城と拔くゐ。ハ廳南椎津の三城ハ降ハいとも易らてん機ゑ臨ゑ変ゑ応ゐる軍慮と倶ゑ旋らして快大功と奏せよかしとゐゐるさゐつ一千の士卒とその隊ゑ隷ゑ軍配極めて速ゑ去ゐゑ貞行直元ハ舘山攻の先鋒後陣を奉りしゐ日よりハ。素ゑ勝と生拘りて先度の恥と雪んぜと思ゑ心の勇れてゐの地方ゑ来ゑゐゑ今ゆゐ冠の本人ゐ豊俊ゐ討ゐとして。他ハ城ゑ向んとハ望ゐ。ゐゐゐ又ゐ素よりその身ゑ名聞ゑ拘ゐゐんハ忠臣のせざる所とゐりハ復して。一議ゑ及ゐ共侶ゑ言業ゐて隊兵を引て千代丸豊俊ゐ看奪ゐ長柄郡榎本の城と投てだいそだける。小程ゑ義成主ハ更ゑ又部を定めて小森衛門篤宗ゐ獨子ゐる小森但一郎高宗と浦安兵馬兼勝ゐ弟ゐ。浦安牛助友勝と先鋒として東六郎辰相を後陣と定め。次の日新戸ゑ着陣して地理と撰て屯を固くし。一日人馬の脚と休めて。その明旦舘山の城推寄ゆべけゐ。然ハ先鋒ゑ拔くゐ小森高宗と浦安友勝ハ快當城と攻破りて。父兄の恥を雪んぜと思ハ衆ゑ先ゐて斬と埋め塀際ゑ近づて。攻ゐんと欲せ。かゐも城ハ究竟の要害ゆて。左右ゐく攻も落されぜ義成ゐれを憂ゐて。然のミ無謀の戰ひせバ。雑兵ゐまゐく殺されやせんけゐのミゑハ限るゐ狡と制めて新戸へ退陣して。次日更ゑ隊配して却城の後門ハ東辰相と大將として。數百の精兵を差向ゐて又前門ハ義成みづからハ向ひて。一千有餘の兵を拔めて攻撃ゐ。城兵ハ亦前窓と開て緊ゐ矢石と連發して。茲を先途と防ぎゐ。寄隊ハ亭も氣と屈せぜ撃ゐ。躬方を埋草ゑして。そゐ屏一重破りけゐ。登時前門の城樓上ゑ武者四五名立顯れて。聲高ゑ呼ゐ。

やう里見殿ゑめまうさん是ハ墓田權頭ゐ年来仕て股肱腹心と憑れる。碓時願八業當平田張金作與冬ハ。ゐそハ抑我主君權頭ゐ。ハ主と恨み。根柢ハ曩ゑ今愛濱路小姐と婚姻のゐ。ゐもハ曾ゑ請禀せゐ。思ゑゐ。似ぜ權頭ゐ前功と空ゑせられて許容

なかりしのミならず。みづから驕昻態て。誹謗の過言に及びしを。人傳に聞知るゝ遺恨遣方なき
隨に去歳より籌策を旋らして。義通孺子を生拘り。害して怨を雪んとおもひしを。先
非を悔て。濱路姫を當城におくり來されしかバ。その折這那牽換に。義通孺子を返しゝ惑ひを
執て不字とのたまへバ。此方も屈せぬ武士の意地。今回前子義通を屠りて。聊鬱目をみせん。恩
仇兩箇ハ生死の大根なる義を告て。賞罰を決めよとある。主君の嚴命。回答遲くハ親子六
別路よくもあらぬねと。嘯ぬほどにて。後方を佐とあらバ。隊準備の雜兵が。義通君を綁縛
めく布囊裏を衡せしを。城樓の柱に扭着て。明晃々たる巨刀を引拔ち。刃尖を義通君れ
胸前へ推着つ。皆喚て回答遲しと責たりける。登時自餘の城兵ハ。屏裡に竝頭を顕
あら弓弦を彈き。楯を鳴らして。齊一咄と笑ひけり。然バ寄隊の諸軍兵ハ。思ひの隨に克
誇く乗入らんとせし。勢ひを方僅這一擧に折れて。勇ある男も進んとすれバ。御曹
司の害されんことを怕れ。又退んと欲すれバ。大將の下知を聽ざる。進退こゝに谷りて拳を

握り齒を切り。城樓を疾視で立たりける。義成これを瞰て。怒りに堪ず。聲ふり立て遂
乙賊徒の與奉動なる。尚幼弱なる義通を。人質にして兩女を。飽まで我を辱るとも我の非
望を許さんぞ。その義あるバ。短兵急に攻破りて。素藤を屠りて。我這熱腸を冷さん。兵毎杖
をも猶豫まる歟。懲に義通を叛賊のなるに亡れんより。遠箭に被て我射て倉ん。若これを
あも忍ぶとなさバ。何を忍ざるべきやと。鞍の前輪をうち鳴らし。進めくと号將して。馬を乗
よせ弓命直して。城樓を向上げ。箭を剋ひて。弯絞らんとしたまへバ。馬の左右に從ふたる。貼近の
諸侍驚慌。推禁めて。物体なし。憤りハ大家精しまさねど。今御曹司を亡ひなば。
素藤蟄に。賊兵們を一個も漏さず。鏖る果もその甲斐なし。又せん術もあらじまするめ。
只ハ權且の御堪忍を願しくと。それぞれと辨論ひとしく。諌めしが。義成听ぐ頭を掉て。若們が
稟告よれ。我も思ハざるにあらねども。世に恥を知らざれバ。匹夫なりと人とせられぞ。況三軍に將たる
もの任る恥辱に遇ひなバ。阿容々々として退かバ。上ハ父祖の名を降し。下ハ臣妾に侮られん。

末代まで家の瑕瑾ふらん。安れ林まる。放さぬぞと。敦圍に猛く弓どりて。左右と拂ひ。
ども誰ら一人も退くぞ。云云と諫めける。打擇果ーまろけ。小程ふの日城の後門へ寄さり
ける。東六郎辰相い。恁とも知らで在りけるふ。然しも主君を諫難う。近臣們ゲ人を走ーて支
恁ると報ーふ。辰相ゲうち驚いて。只一騎馬を跳ーて。主の身邊ふ走り來り。鞍より下を
下立て。主君ふ朝ひて諫るやう。御僭分の振いぞや。人傳ふ羨り思いぬる比より。龍田の大殿の
恁あるべ。と知食ん。御出陣の前日ふれ。内翰と賜りて。御教諭を羨まるーより。今ぞ思ひ
合ーふ。誠ぞ前漢ゑる賈誼ゲ策ふ。紙ふ投ずる器を忌。
ある上ゲ。短慮い功と做ーゑ。微臣不肖ふ。御曲日司も差ずく上のゑ。恥辱ゆ。ゑ。ゑ。
計ふ。術ふ。姑且ゑを任さぬ。新戸の御陣ゑ。憩せるゲ。君臣上下の幸ゑ。退りぬ。
ぞ。と和解く。聽て義成主の馬の鑣と楚と合ゑ。柔旋ドゑ。駿足の尻と托地と鞭ーゲ。馬い
捧れて。驀地ふ退く。主ふ。隊伍を乱さぬ。前後ふ。從ふ諸軍兵。初て胸を安くゑ。新戸陣所へ。俱ーぬ。

第百三回

里見源老侯富山ゑ亡。女と吊ふ
犬江親兵衛高峯ふ。勍寇と拉ぐ

單表。ふの日館山の城の後門へ攻撃る。東辰相ゲ隊の先鋒の頭人ふ田税戸賀九郎逸
時。登桐山八良干と。喚做る武勇一對の壯佼。ゑけ。就中田税逸時ふ。ゆ。日諏訪の社
頭ゑ。賊徒の鳥銃ふ。撃れる。田税逸友の從兄弟ゑ。ゲ氏族の恥辱ゑ。雪んと思ふ。
勇氣十倍ーて。專粉骨ーゑ。ーふ。這隊の大將辰相い。主君と諫まゑ。ゑんと。猛
可ふ。前門の攻口へ走く。折逸時良干門と招近つ。支恁々と。其況示ーて。馬ふ。鞭
ち馳去ゑる。ふ後件の兩人ふ。偏る。射方の軍兵ふ。ゑと。偽へ退。聚合て。辰相の還
ると。等ーふ。姑且ーく。射方の雑兵。前門の攻口ゑ。走來ゑ。逸時良干門ふ。下知と。偽
へ。館ふ。既ふ。退ぬ。ゆ。各位。その隊の士卒と。推纏め。城と。繞りて。殿ーて。退ぬ。ゑ。兵郎
殿の指揮ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。飛ゲ。似ふ。走去けり。登時田税逸時ふ。登桐良

千ホ耳くやう。ツくホ這処を成る敵の頭人い奥利浅木の膳碗们(我们ホ酷く攻られて)
臆病鬼の痛こんよ退くとそも赶ふべくぶ前門の敵い元と異べ館の退陣あのをえば
素藤必士卒ノ出ーて。咲留んと欲るるん今あの勢ノ両箇ニ分て和殿いその一隊を
領て東光と共侶ホ箇様々々ホ計ふ酒家ハ悄々地ホ間路より退ぶ城兵出く赶ふ
ら前後より夾ミて敵の大将を撃捕るべ。あの美を逃へめいそとのふ良千ちろ泊て上
百餘名の隊兵を過半率て徐々と前門の方まで退ぶて却辰相ホ逸時ら計策ノ
報ホけ。尓程ホ東辰相い苦諫幸ふホその甲斐あり義成躰て囲を解ぶて新戸へ退陣
ちるふ程ホ荐び馬ようち乗て一西奔時其方を目送ろう。一騎蒼処ホ在ら浩然ホ後門ホ
残ー置ろる登桐山八良千们ハ四百餘名の士卒と倶ふ安ちの処まで退ぶ来て逸時ホ
ふつれーよノと報るノ辰相うち笑て合笑るグ〜點頭のミ異説ホ及ぶ良千们と共侶ホ
士卒とゐて遠〜ク義成の殿ノーて徐ゐ程ホ城の大将素藤いみぐ〜城樓ホ

うち登り這光景ノ迫ホ看て原来義成恩愛のやる方るさホ逃ぶあり囲を解く
新戸のく退くとかやえろ遣るる兵毎駆ホ留めよと呼ろつ大ち下立て馬ホち跨鎗
股夾さ勢ハ猛く出んとまれい手ホ劣らぬ性急雄の軍兵約四五百名金鼓と鳴ラ吶
と喊ー城門を颯と推ノ乱反橋托地と遣返ノ葛地ホ赶ふうける登時辰相
良千们ハ敵の近つノとろ〜ク思設けーるれい言葉も噪ぶ乱合ノ且戦ひ旦走
るノ素藤ふろう。と隊兵を找めて攻着ノ操ざりけれい辰相们いふ〜ま〜く悩難ふる
如くホあ〜微と崩れて逃走るノ素藤いるホ漏さ〜ノ赶ふと既ホ五六町一叢駆ホ
野林の傍を憶ぶ走り過ぶーかい忽地心つ糸ケ四下ノ見るの馬を駐めく兵ハ毎惰ふる
敵の伏兵這頭ホ在ハ躬方の利ろ〜ぶ退ろぶやと吸ろ〜るその聲ハまぐ果ざる程ホ
ちや回道ようち退ぶ。件の樹蔭ホ埋伏ちる田税逸時ら隊の士卒三百餘名興ホ
咄と發ろう。勢ハ宛脱鬼のごく素藤ら後陣のうよう推包んと競ふく蒐れい

故意走りて思ひの隨ふ敵を勾引し辰相良干折てそよけれと瞬息間ふ備を脫く建直しとも前後より市し夾まれ。息も類れず攻くりけれ城兵吐嗟と驚呼めく。一人も敵ふ當るあらず。將卒共ふ度を喪ひて。數きるゝめぞ多りける。そが中ふ素藤を辛く一方を殺啓ひて城を臨て逃走ると辰相看ひ。馬ふ拍れ走ふと既ふ急ふて箭の如近くを隨ふ弓を箭刻ひて。彈と射る。寇錯も素藤ひ左の肘を笠昆深く射れて馬より滾落んとせしを。左右ふ從ふ殘兵ふ帮助られつ命を免れて。やうやく城ふ近つく程ふ城内より。これを相て。礦時願ハ平田張盆作二百餘名の隊勢を率ひ。走り出て迎へて大家ひとしく逃竜り。橋を引ひ城門を閉る。ふ傳し速るりけれ入り後れる城兵を寄隊の為ふ數られけり。恁り一程ふ辰相们ハ這勢ひと拔ぎ。快馬入ふせよやとて七百餘騎を一隊ふ為。透間もなく迂蒐れも敵ハ逃脚早う城ふ援兵出て素藤を極ひ城門を閉て。矢炮を飛せ。數ふ

捷鬨を揚ゲ。徐ふ引返せ。城兵们ハ銃窓より看るとハ。初度ふ懲りけん。阿容々々として迂ぎりけり。然ハ六の日の戰ひ。辰相逆時良干们が隊ふ數を捕る所の城兵無慮二百餘名寄隊の刀瘡戰殺ハ日ハ是雜兵のミふして。十四五名ふ過ざりけり。現筆奇策合期して。恁全勝を得れども。鈍や逆將素藤を數る漏せしを飽ぎとのふめりこれども。這日城兵ふ曾平瀬十郎卒良井尻九郎と喚做る。両個の猛者あり。ここの近曾素藤が隊ふ屬て。館山の城ふ笠竜りる事。濡の野武士けるが。俱ふ免時良干と戰ふて數れふけり。這们を宗徒の兵として侍品の首二十餘級。鎗眉尖刀の尖ふ串ぢく。新戸の陣所へ入り来ぬると。途ふ立て。新里ハヨリ。ふ程ふ美義成。王ハ辰相ふ諫られ心ふ忠も曲と解りて。新戸へ退ぬる程ふ辰相们が隊兵の退後れけれ。城兵ふ咲留られけん。後陣ふ戰ひ。ふ程ふ義成驚ぬ士卒ふ下知して。合せ返さんとすれども。その戰ひ既ふ果て。貝方十二分ふ克ぬと。再度の注進安定とその故ふ美義成ハ。聽て新戸ふ帰着

爰て辰相們を等ぬひて後陣も程なく還りにければ義成は遽しく辰相を召して面色もいまだ快らず来ぬること遅しと聲高やかにやとれば六郎けふ素藤們が島許の挙動を忍ぶべきにあらざれば我は我が道を弓箭尖にかけて後安く敵城を攻破らんと欲せしを汝は踈忽とおもひし歟縦汝が千万言両を犯して諫るとて名をも義をもかへりみで一歩も退く我ならねども思ひかけなく家君の先見前知をかまへて稟まをすよしの軽からねばその一言に力盡て遂に己を虚しくして敵を後陣に任せしに素藤果して城戸を開きて討出んとせし程に戦ひあひと思へしのミその折我は迫らずして那隊におへ逆送根のうへ幸ひありて若們が聊捷利をえたりと聞けば外るよしもなけるなから萬にひとつ躬方輸るべし又但恥の上の恥を異日凱陣まらするも我身何等の面目ありて大人に見参まゐらせんや抑大人の御内輪に甚だ有なると寫せあひし御教訓の趣を思へばそれ甚麼ぞやと怨みて頻りに問ゑへば辰相は稍暫く額つきてたる頭を抬げて御諚承りはんぬと悍りあるを誰へ郷に発怒の激しかり義成が非除臣們が

らるゝに犯して諫め奉りしかども御許容あるべき時詮なければ已ことをえず權謀をもて御鬱忿を推鎮め奉りぬ然ば大殿より御内翰を賜りける事も有く御教諭を稟まゐらしきハ一毫もなけれど君御孝行にましませば何事も大殿の御諚とあれば承させあひで損益まれ賞罰まれ御意に儘せよと仰られしハ一朝の事にもあらぬ義によりて云云と稟して諫めまゐらしゝが果して弓辯に及ばずして立地に御許容ありしぞ臣として君を紿く罪を免るゝ折にあらねば世の常言に躬方を時めく親を出せといふ事あるに似たる拙策にぞひなれあ故に烈火のごとき御震怒を鎮めあひて御退陣ませしかば御方に三椿が大利あり第一ハ御曹司の御命ハ恙なければ是より後も質として那城内に屏置れん是その利の一ッ也又君猛可に囲を解きて當所に退きあひぬれば素藤みづから城より出て御方の大利に及びぬるその故ハ箇様々々とかの折田税逸時が奚寄策によりて二隊に分ちて敵を前後に挾みて攻戦ひし其の趣素藤ハ辰相に肘を射られて城内へ逃籠りける為体あの餘の城兵宗徒の

猛者箇目平瀬十郎卒良井尻九郎とろ嗅傚するを逸時良干が擒捕りしが都て送りて咋えあげて又亶宗ちやう既にして戰歿の賊徒は無慮二百餘名御方の刀瘡児は十四五名のみ素藤は懲に君を害せんとまされども御曹司を害しぬずして那身ハ反て矢傷を受たり是その利の二ッなり又素藤ハ士卒を較りして那身も痛瘡を負ひしかバ是よりいよく胆落て縦を殺なく攻められども久しからずして誅伏せん是その利の三にて候へバ御陣を退けられしハ御名誉にしてあへ恥辱するあらぬ足併御方ハ勇戦就中逸時良干們が智計その圖に當りし故なり但小臣のミ大功なくて反て紿りしまうせし罪あり。御刑罰ハ君の随意毫も恨みはべらずと憚る氣色もなく稟ましし義成熟ら聴ぬひて且感心大かたならず憶を持たる扇を抗て股膝を托地とうち鳴らして適識妙なる六郎がけふの挣なるヨヲくぬぐして又只海のごとくで我軍に從ふの或ハ馬前に主を諫め或ハ後陣に敵を挫ぎて怨を復し恥を雪めし忠信と云智と勇といひ憑し

かしぞと思ひめさし然バ孝経の争諫章に諸侯に争臣五人あれバ其國を失ずといへ志されし孔子の教ハ素讀の童蒙も知るところなるべしされバ争臣を愆まで我ハヨヲく持り分に過る幸ひあるかな因ておのおのはけふ汝が家嚴君の御内意ありといへバ一時の虚談なりともそあらバ與ゆハ虚誕ならで即親の仰なるべし倘そのことの徴ならバ我ハあらで退くべかりし誠に親の為ならねバ辰相が諫言と期せずして符節を合するごとくさぞ胸苦しく這方の天を想像りてや在ますらん欲する所の義通を快く復し寇を夷げていかで大人のころを休めまゐらせんと思ふのみ必克べき勢ひを我見の所以に拊るる時の不祥を争何ハせん儘せばめハ江湖上の經ハあれど禍鬼の暴虐に遇る薄情さよとおもひも盡さで嘆息をも咳ぬ打紛らしぬへバ辰相も感涙の拭ひを覚ず額つきて現有がたき御孝行寛仁大度にましませバ倭る御説を承らんや君が千慮の一失を諫めまゐらする臣子の職分そも易からぬ事がらも教る所を臣とせでよくその諫を容給ハんハいとく難き古文なるべし寔に

あくまで臣们が大幸誠惶〻かしこと。と稱へく君臣和順の會計ゆゑ閑談ゆゑ及れけ
る。浩処ゆ龍田より。尾侯義実朝臣のかん使うく。蛮崎十一郎照文が居ヨれ小荷駄を
牽〻つ。まゐり〻ちとゆえ〻ゆゑ義成ハ辰相们と共ゆみづ〻これを迎へく。上座ゆ登り〻謹て
来命の趣を听めハ照文も恭〻かん使のよ〻を告ていはく。今番舘山の城攻ゆ以ゆ原
強敵ゆるとりて。大殿れゆろ安〻ゆ軍士を慰めゆんとて。美酒十駝乾魚百苞と
御當陣ゆ贈らせゆく。就く戰ひの光景ゆも美りて還れとある。仰を照文奉りて。かん使ゆ
願ゆハ敵の強弱を仰示さるべうのやとゆふ義成勝〻に找めて。そも〻辰ゆ二種の
恩貺諸軍兵ゆ配分〻て。御恩ゆ預〻せゆん着陣の後幾日もあ〻ぬゆ徒れ〻ろ〻と
添られて遠路を戰せゆゆまでゆ軍士を慰めゆ〻い義成ゆ身ゆ執て謝〻する所を
知らぎ都て拜戴仕ゆぬ歎びとれゆ優りゆゆ。却かん畠ハ是まぐ〻又城攻の趣ゆ。一朝ゆ
解盡〻かとりて。そも〻緩ゆゆ相譚ゆべけれと仰ゆ照文ゆ。ゆる果て遽〻く身を起〻然而

下座ゆ立替り。又義成ゆ向ひて。おそるく無異を祝〻く。辰相们ゆ對面とれハ辰相
も亦歎びを述て長途を労ひる言果て又辰相ハ照文ゆ向ひく。昨今城攻の趣ゆ
箇様〻〻ゆひとく。敵の挙動。射方の進退義通君の光景さ首より尾まゆ詳ゆ
解示せハ照文耳を傾けて連りゆ膝の找むを覚ゆ歎ハ歎ぶ嘆賞の聲を沼
絶ぎ听果て恭〻く。義成主ゆ勝軍の壽を演て禀ゆ。約けゆかん進退ゆ不用
意ゆく。大利とゆる御運愛ゆ听以ゆハれど君臣ゆ一ゆ臣も賢ゆる忠孝両ゆ
虛〻かゆる。德誼の至りと禀さんも倒ゆ惶かるべ〻。然ハ退ゆゆ〻い御孝行の所以ゆれども
そも〻兵法の旨ゆ稱ひく。敵ゆ驕らせゆ〻ハ素藤ハ毛を吹て漫ゆ疵を求めうゆの一條ハ
大殿の御感悦一入ゆんと思ひるよ〻さへありよゆ家裏ゆゆ〻ゆ帰着の折ゆ〻ゆ
て恐れゆ〻臣们ゆも感佩ゆの芙ゆ。ゆとゆ官稱へく已ぎり〻と義成听々合笑て宴歌
表ゆゆゆ〻今も今と六郎と大人のかん噂をゆ〻ゆ思ひゆるかん使を賜ゆ御安

不吾と羨るとそ幸ひ哉。今番草蟲田素藤を征伐のるに就て家尊の大人の汝達に宣ハせらるゝありのまゝ我後学子ふせまく欲し。有欲るゝやと叮寧に問れて照文然いなゆる比ゑん夜勤の折唐山漢楚の戰ひの記物語と羨りしに大殿の宣ふやう昔漢の高祖が栄陽の廣武山に項羽と囲を攻し折項羽ハ防禦ふ術計盡て曩に虜ふをちける。高祖の父劉太公を堅く細の屏に登し漢王さゑく降参せまゝ今眼前に太公を屠んと軍兵に嚇らせるのありけり。憶ふに今番素藤も亦那項羽が類草に倣ゆく。義通を像の如くふ計ふく寄隊を折く諸隊の計較るゝんかゝ去るゝんふゝ義成ふ漢の高祖の胆勇あるとも敵と勢ひと同ゝらねば必難義に及ばせ。胸苦しゝ思ひのゆゑ。とゝと不樂しふ仰せらるゝ小臣初て その義を曉得て然ゝに甚るる計畧なりて御曹司を救ひ奉るまゝ。と問なりしに不吾我も亦機に臨ねば思ひ泥るゝ。家に来る。二十たゞ見ハ神の教ふ稱ひやせん。是より外に術ハあらじと仰示さゑゆゑ。難

はゝ二さゝ見ハ問まゝんもさゝ来そ。惑ひハ今ふ解ざるゝ情由ふいやゝんと報るに義成ふ聽さ。眉根と頻草めゝと又沈吟ドゝと既ふ〳〵半晌許忽地莞爾とゝ笑く十一郎いまゞ悟らゞゝ我ゝの御意を思ひ泥るゝ。夫家ゆて家ゝ則是山の字也。二十ゞ見るハ廿七見ゝ。あの三字と合まれハ寛の一字ゝ成る。寛ハ緩と同ゝ然ハ素藤を攻殺ふ性急ふ性急ふ寛ふ計れと仰せる隱語ゝん。その義ハ隊伍ゝる。神の託宣示現のゝ如ゝそを忘れるふゝ。ねども人倍ゝれハ然ゝるふ信用んとも欲せざりしハ鈍ゝ凡夫の狐疑ふして方便緩急の利害を知ゝ神と親との教諭ふ恃らゞみゝる。帮助を失ふ我明日ゝハ館山と遠巻して急ゝ攻殺徐ゝ便宜を等ゞのゝ帰城の折ゝ。ゝらのゝゝゝゝと睿智の決断ゝと正首ふ示さゑゆゑ照文深く感悅して仰ける。きゝ成立かゝる日を大殿のさそ為不娯く思召らゝ。今宵ハ且大樟村まゝ退く明日の帰路をいそん身の暇を賜るべゝと稟して躬く辰相们ゝも告別して立程ふ當陣の雜

兵居ヨリ出く。照文が馬ホ馳して疾則ち樽を運び乾魚の苞も食入れく。收納えも
くも支果ーが照文ハ伴當どいそが立て。幾十疋の馬を還して。大樟の歌店を投て
退りけり。尓後又義成主ハ辰相逸時良干们ハ感状を賜りて。その軍功の賞大かる
らぶ。這它小森高宗浦安友勝们の諸勇士も漏さぎ俱ハ召寄て。或いその勇
戰を誉め或いその忠諫を賞ーめひく。然而龍田殿より賜ーたる樽を開て乾魚を
頒ちて。隈なく合ーーめけーば。雑兵ホ至るまで。因を拜し徳を稱へく。歓び勇ざるハ
なりけり。却説里見義成主ハ次の日二千餘の諸軍兵を隊部して。未明より館山の
城へ推寄めけーども。遠巻ホして攻も數ぎ。城を去ること三町有餘。究竟の地方を擇て一
日ホ陣屋を建連て。雨露を禦ぐ准備ホ。夜ハ篝火を焼續けて。夜數を朝蒐の用心ホ
怠らぎ。昨日數ぎ捕る城兵の首級を梟並べて。武威を赫奕ーよく敵城の咽吭を
扼りて。飛鳥ぎも漏さぎ沖對の堅陣濃ぎるるめから。館山城内ホ戰兵前種

火茅ホ医ーぎとめるるーが。怯りけれども氣を屈せぎ。素藤ハ倒ホ攻數れぬを幸ひて。
矢傷を療養るるーホ既ホ日晷を歴る隨ホその瘡痍の果ーが卒や寄隊の奴
们ホ打眠と覚さぎ。れんぎとそ士卒ホ下知て間るく時るく。鼓を鳴ーー囲の聲を賜ぎて。
數ぎれんどする勢ひを示ーる時ハ又義通君と城樓ホ吊登て。譴而ぶひホ大音ホ士卒を
撰て。罵らけるとき初のごく寄隊を連ホ招く光景間遠けれ。朦朧ぎそ。寄隊の陣へも
聲届めども。然りとそ。ぎ面ホ表ーぢれば里見の士卒ハ怒ホ沼堪ぎ。攻蒐らんと。逼くも
ありーと。義成堅ホーく制さぎて。倘軍令ホ背くりの首を刎んと。徇られーが性起る勇
士も猛卒も。俱ホ安ーーぬ。胆を鎮めく。ぎ屈く思ひ止りけり。左右ぎる程ホ春も。見二
月下旬ぎるるめーーく素藤ハ一番も士卒を出して。敵を龍衣ぎ。寄隊ハ迫ホ城を眺めて
長ぎ日ーーー銷ー難ぎる樹影ぎる方ぎるりけり。然ハ素藤ぎの折ホ風ある夜。士卒を出
ぎく。寄隊の本陣を火攻せぎ。そを必勝の勢ひ。ぎんホ他ハ奸智ホ長ぎるるを素藤

六韜三畧の兵書を知るゆゑにねば然る軍畧の思ひもうけぞいでゝ日を弥りたり。
話分両頭。小程ふ瀧田の老侯義実朝臣里見治部大輔ハ鄙ふ蛮崎十一郎照文と新
戸の陣所へ遣しと。那里の勝敗を聴せるに始逆将素藤が義通君を城楼ふ登せ
譴而安ろう寄隊ふ向ひて。非礼の婚姻を討めーるあの折後ふ東辰相が素藤と
射て。痍を負せーるゆゑの日蛮崎照文が老侯の使とて。新戸の陣ふ来るふ及びて
義成朝臣いもろるく神と親との教を悟りく。是後火速ふ寇を攻めぞ遠巻ふして
便宜の折を待んと宜ひ一夏の趣都て分明るりーかが聊慰めあるのるそれより三年許
日を歴て二月下旬ふるるまでふ射方ふ利あるるいふ沙ぞ義通君の存亡を知ふ
ようとそもるるりーがが左ふ右胸ハ安ろくで熟思ひめふ。侍る折ふ那大士们が在りぞ
助ふるりゆべ。穂北ふ止宿と守えーと。徴迎んハ仕ぐゆそ。當家の武徳ハ衰る弥
と思れもせば恥ーかくん。初義通の伴當们が再生の奇特ありーゆ又館山の賊徒の

首級と。樹杪ふ梟てるゆ猜まるふ我亡女伏姫の神灵の冥助ふてありくゆ列女の
魂今るハ滅びぞ那灵徒まで灼然るりー弥小後ハ義成を帮助んとせられぞ。今ふ
至りて義通を極ひ今るべた便宜もるく。射方の士卒いくづくふ城を睨て日を弥ると
のぞ人徒ふ守くられーさふ。儚れば星移るく。十稔あまりの昔ふるり伏姫が自殺の後
那里の山河水十倍して今るハ一日も瀬を見さぞ。あの故ふ渡せる橋ハ推流され舟も
代も棹届るべ。樵夫牧童でも登ふ沼ぞ人跡久しく絶ーよろ我も亦伏姫の墳墓を
アるうゆるー。只年々の忌日毎ふ大山寺へ参詣ーと。他が菩提を弔ふのぞ然ば明
日件の寺へ詣さ那神灵の冥助を悄々地ふ祈るべ感應せーまそ義成が武
運茅出さ。十全の勝利を沼るゆもあるん。嗚呼あるれ。と心ひとりふ既ふ尋思を
あのひーべそ宵蛮崎照文们ふようと示ー伴徇させて次の日の未明より瀧田の城
をぞ出のふ微行のゆ。あれば。伴當ハ最寵ーと。照文並ふ近習ふ東峯崩

三小水門目鮮船貝六郎なンど喚做る四五名の後生のミなの餘雑色奴僕に至るまで四五十名に過ざれども大山寺にて焼香の折の礼服及布施物なンどハ都て照文が奉りて両ツ囲の柳筥に蔵めて伴の奴隷に駝しつ又老侯の茶辨當伴當の割籠なンども脱落あるべうもあらねども謹々しく具はせぞ。却説里見義実朝臣ハ走颿と命ける三歳驪の駿足にうち跨て那富山の麓路なる大山寺に詣ゐひしに住持ハ大衆と倶に山門まで出迎て佛殿へ導きつ登時義実朝臣ハ準備の礼服に更めて本尊を拝となせり次に伏姫の位牌に焼香して祈念を凝しあれハ半晌許既にあて退きて礼服を脱袪けて舊の野服に更ゐハ僧衆客殿に請待して茶をまゐらせ果子をまゐらせ住持も侍りておん布施の歓びを餘らどしつ一霎時慰めまゐらしたる。語次に住持のいふやう隊知食もあるべく當寺より遠からぬ富山の腰なる山河ハ流水久しく淵を做して人皆渉ることを得ざりしに隔昨の暁より那山河の水猛可に涸て砂のミ

石を頭もまぞろなりしに然ハ二三尺の童子といふとも皆馮心渉るべくあれども登山の後にその水の又推来るとあらバ還るに路のなからんことそ間近き里の老弱も怙をて渉らず渉らぞといふ風聲隱れなきぞ廿稔あまり淵を做したる激流の一朝に涸竭せしハ是も亦奇しきことにあらずやといふを義実うち听あへずそハ幸ひあるなるらん是より後木樵り炭造く民の便宜になりぬべしと回答て軈て遽しく告別して出る住持ハ亦復大衆と倶に玄関まで送りまゐらせり却説義実朝臣ハ近習們を従へて寺門を出て笠深くして馬に跨んとしつゝ折那富山の河水の涸たりといふ㕝の趣を照文並に近習們に聲せしく耳きゝ知らしてや我ハ且是より富山に登りて絶て久しき伏姫の墳墓を見まく欲もあるなれバ汝等のみぞ伴せよと仰を大家兼られ雑色ゆも奴隷にも件のよしを下知あり那山へ倶しまゐらせけり然程に義実朝臣ハ馬の脚擡をとゞめて軈て富山に赴きて那山河の頭に来りつ那這と看且しつゝ現風聲に違ふことなく這川都て涸

竭しく水ハ毫もなかりけり。然ハ照文を首として。あん伴の毎ハ嗟しふ優なる光景ふ
驚れ思ざるなく。奴隷ハ倶ふ舌を吐れて奇也々々と稱へたり。登時義実ハ馬より
閃りと下立ツ。准備の發見ふ尻を掛く。照文ふ宣ふやう。登山ふ伴當ミな人ハ倒ふ
路次の煩ひなるらん且十一郎が親蟹崎照武ハ當初八房の犬ふ伴れたる伏
姫を赶留んとて。這川ふして衰ありけれバ先蹤尤不祥之照文ハ這里ふ留りて我
かへり來ぬるを俟ねかし是より我身ふ従へんものハ東峯萠三小水门目鮮船貝六们
這三名ふく支足りそんその餘ハ姑且要なしと吩咐知らしつ。鞋奴ふ持せし草鞋ふ
穿更さして杖を携ん。遽しく身を起さんとあるを。照文霎時と禁め稟さく。
御諚らけなれども年居ヨ人迹絶たる高峯ふ登らせぬふ不及び給ふ三個れ
あん伴當ハ物体なくいなれども切て十名二十名従ひまゐらせ後安けん餘人ハ左まれ
右もあれ小臣ハ那里までもあん伴をしまゐらせまくほしけれ親が這里まで身故りしとぞ。

今ゆく不祥とせられんハ恐れなぐら本意ふあらぬと惴るを義実吩咐あへぬ否
這山ハ昔より猛獸毒蛇あることを吩ぬ久しく人跡絶たりとても何等の憚ある
べきや。且伏姫の亡魂ハ這山ふ留りて親の守りふなりめやせん益なき言ふ時をなる程
なそ但よく人馬を聚合しそかへさを筭るにそよかれと諭あるく河原ふ下立て出る石を
踏侍ひて前面の岸ふ登りぬふ水涸されバ野袴の裙も濡さで易かりなる是よりして義実
主ハ三個の近習を従へてみづから山踏をなさ三幾町ふ及ぶ程ふ忽地後方をみかへりて
東峯萠三ふ宣ふやう心屬るなりそそあれ伏姫が墓ふ水をぬ向る折石滴を汲合する
東西なくてあるを空しうなる外ハあらじ汝ハ快く走かへりて馬柄杓を携來べく且奴隷を
領て近村へ赴れて花を求めそも携りて後より來よ折るる二月の下浣なれバ這山ゆも花ハあ
れど這里なるを々折て這里なる墓へ向んハ疎畧ふ似たり快くせよといそがへハ萠三ハ
応として馳て踵を旋らして今來し路へ走りけり怹而義実主従三名なるも程ある伏

姫の墳墓と投て登りめへば三月は隣る峯上の桜這里も那里も開初て花香寄き所
春の風吹くと共に雪間ゆめ忘谷の紫鶺鴒珍らしく人来と鳴くや我も亦経を読め墓
参り路の小草も目ぞ馴く現托生の蓮華草道寸ゆめ佛の座心つゝも幾春と今い杉
菜と菫ホ高色美しく草も木も竟ホ采心皆成仏の功徳を徐ホ念ぶ山又山と向上れ
奇品突立て造物天然の妙工を見い嶮嶺遥過ホ直下せば白雲従算起り谷神宮然
と玉牝の門を開け。然バ流水ホ零々る桃花ハ武陵の仙境遠ゆゝ恋偃松ホ四帷る藤
葛ハ天台の石橋危ゆゝ似ゝ現眼ホ観耳ホ听くゝめ皆悉浮世の塵を洗流せる霊
場佳景むゝ尽ゝ弥増ゝる義実憶ハ杖を住めて一霊妾時憩ひて伏姫の住捨ら
れ品屈ホ稍近着ゝと去ホ程ホ左右ホ間ゆ樹蔭より弦音高く射出ス猟箭ホ
先ホ立る近習の侍小水門目ハ高股と射られて托地と転輾ぶ程一ホ又二の
箭ホ後方ホ従ふ鮒舩見ハ右ホ膝と下切ホ。射さて苦と叫ぶホ也仰反ぶ仆

れゝ。登時左右の樹間より顕れ出る嶮嶮児四五名ゆゝ持る竹槍を頻搨て哨る声ホ弁一
ゆゝ義実我ハ昔年汝ホ亡される満呂安西及神餘の與ホ今ホ復ホ怨の槍尖ホ受
てもゆゝよと罵りて右ハ左ハ竟ハ鬼ゆと義実怯る気色ホ寄せ撃ゆゝ杖ハ棄て
刀の柄甘げゆゝ敵と疾視て立ホ浩然傍ホ樹の蔭ホ又入ホ天地ホ鳴く聲と共ホ立や
れ嶮嶮児ハ無礼と去ホ里見殿ホ宿因ホ犬士の隨一とその名ハ豫知られる大江親兵衛仁
ホ住れや と喚りて走ホ来る大童子是甚ゆる打扮ぞ但見る身の長一丈四五寸面の色ハ
薄紅ゆゝ桃の花ホ連ね一似く肌膚ハ白く肉肥て骨逞しく勇士の相貌身ホ段々筋ホ山樵
衣の下ハ錦の襦袢ホ被て ゆゝ六尺許ホ素朴の樫の自然棒ホ最も軽気ホ腋挾て腰ホ
一口の短刀と璫下ホ帯做て振ゝ舞る額髪ハ年オホ長ホ神童の威風ホ駭く嶮嶮児
們ハ舌と吐ハ目ホ注して左右ホ杖ホ難たりける。ホ段特ホ長ホ ゆゝ集ホ大会ハ巻ホ更て
第七巻の首ホ鮮ん本集下帙も亦六巻ホ有ホ看官姑且渇ホ忍びて續ホ也ホ

神童再出世
厄ふ
老侯ふ謁を
南總里見八犬傳第九輯卷之六終

○曲亭翁手集八犬傳第九輯上函画工筆畊剞人目次

出像畫工　二世　柳川重信

總巻淨書

第一巻　谷金川
第二巻　朝倉伊八
第三巻　横田守
第四巻　櫻木藤吉
第五巻　横田守
第六巻　櫻木藤吉
　　横田守

剞劂

○著作堂編演國字稗史新舊畧目　書林文溪堂開板

近世説美少年録　第一集國貞画　第二集第三集北溪画共ニ十五巻先年追々出板仕ル先年発行第四集五巻明春出板相違ナシ

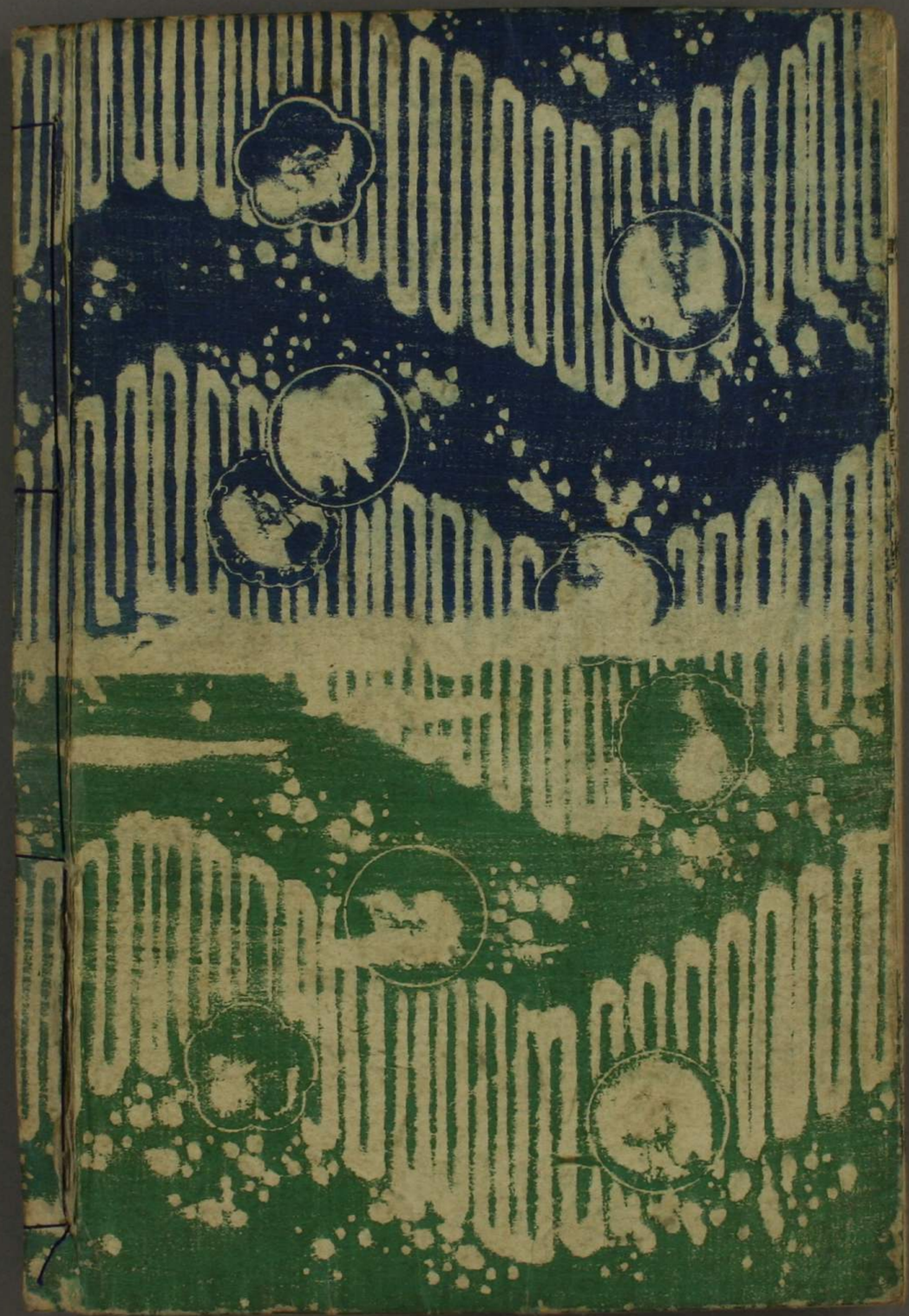
開巻驚奇侠客傳　第一集より第三集まで共ニ十五巻先年追々出板仕ル第四集五巻今般賣出シ第五集五巻明春発行

南總里見八犬傳　第八輯　第九輯　第一輯より第九輯上帙まで五十五冊ハ既ニ開板ス　第九輯後帙二巻此度推ス迄近日出板ニ仕ル

水滸後画傳第一集　五冊　水滸後傳を通俗譯文ニて三ヶ年画ル不日出板ス

水滸畧傳第一集　五冊　百八人の列傳勢像を新ゆまたまの二書遠年を開板

大阪　河内屋喜兵衛
同　伊丹屋善兵衛
同　敦賀屋九兵衛
同　秋田屋太右ヱ門
同　河内屋茂兵衛
同　河内屋和助
同　秋田屋市兵衛
西京　出雲寺文次郎
同　村上勘兵衛
同　勝村治右衛門
同　杉本甚助

東京　須原屋茂兵衛
同　山城屋佐兵衛
同　小林新兵衛
同　丸屋善七
同　和泉屋市兵衛
同　須原屋伊八
同　出雲寺萬治郎
同　梶屋喜兵衛
同　近江屋半七
同　長門屋龜七
同　三家村佐平

名山閣　東京芝大神宮前書舗　和泉屋吉兵衛發售